

京都大学こころの未来研究センター  
**研究報告会2013**



2013年12月15日(日) 13:00-17:30

京都大学稲盛財団記念館3F

大会議室・中会議室

## 全体テーマ「こころの社会性」

### プログラム

**13:00-13:15 センター長よりご挨拶**

**13:15-13:55 研究報告 1**

「正直さには意志の力が必要か：脳科学からのアプローチ」

阿部 修士（こころの未来研究センター 上廣こころ学研究部門 特定准教授）

**13:55-14:35 研究報告 2**

「地域コミュニティの幸福感：文化心理学からのアプローチ」

内田 由紀子（こころの未来研究センター 特定准教授）

**14:35-14:45 休憩**

**14:45-15:25 研究報告 3**

「発達障害と現代の意識：臨床心理学からのアプローチ」

河合俊雄（こころの未来研究センター 教授）

畑中千紘（こころの未来研究センター 上廣こころ学研究部門 特定助教）

**15:25-16:00 休憩+ポスター**

**16:00-16:30 指定討論**

三嶋理晃氏（京都大学理事（国際担当）、京都大学医学部附属病院 病院長）

熊野英介氏（アマタホールディングス株式会社 代表取締役会長兼社長・公益財団法人信託資本財団 理事長）

**16:30-17:30 総合討論**

## 研究報告 1

### 正直さには意志の力が必要か？ —脳科学からのアプローチ—

阿部 修士（こころの未来研究センター 上廣こころ学研究部門 特定准教授）

「嘘つきは泥棒の始まり」「正直は一生の宝」と言われるように、一般的には嘘をつくことは悪いこととされ、正直であることは美德とされる。しかし、嘘をつくことで利益を手に入れられる状況では、ヒトは必ずしも正直に振る舞うとは限らない。嘘をつくかどうかの最終的な意思決定には、周囲の状況や個人差、あるいはその時の気分など様々な要因が影響している。

正直な振る舞いや嘘をつく行為の背景には、当然ながら複雑な心理過程とそれを支える脳のはたらきが想定される。嘘をつくことは人間社会において普遍的な現象であるため、これまで心理学の分野で多くの研究が行われてきた。さらに、近年の脳機能画像研究の発展と脳科学に対する注目の高まりから、ヒトの正直さ・不正直さの背景にある脳内メカニズムについての研究も蓄積されつつある。

本研究報告では、まずヒトの嘘を対象とした脳科学による過去の研究成果を振り返る。一部の先行研究は、実験室的・恣意的な条件設定のために、必ずしも現実世界における正直さ・不正直さを検討する実験パラダイムとは言い難いことを示す。次に、この問題点を踏まえたうえで、近年行われている正直さ・不正直さの脳機能画像研究を取り上げる。特に発表者が最近行った、「正直に振る舞うためには意志の力が必要か否か」という問いに対して脳科学によるアプローチを試みた研究を紹介する。具体的には、正直さの個人差とその背景にある報酬感受性についての機能的磁気共鳴画像法（**functional magnetic resonance imaging: fMRI**）による研究を紹介し、脳の報酬系と呼ばれる領域と、意図的な行為のコントロールを行う前頭前野の相互作用について議論する。

人間にとって正直に振る舞うことは、先天的に備わった自然な行為なのだろうか？それとも、後天的に獲得される意図的な行為なのだろうか？本研究におけるこの問いは、中国古典思想における孟子の性善説、荀子の性悪説の考えにも相通ずる。本研究報告を足掛かりとして、こうした問いに学際的に迫ることが可能な脳科学の有用性についても考察したい。

## 研究報告 2

### 地域コミュニティの幸福感：文化心理学からのアプローチ

内田 由紀子（こころの未来研究センター 特定准教授）

本研究では「地域」という社会生態学的環境・自然地理的環境を共有している単位において幸福がどのように醸成されているのかを検討している。

近代化の流れを汲み OECD をはじめとした先進諸国を中心に「個人の幸福」を追求する動向が見受けられる。しかし、幸福の捉え方には洋の東西での違いがあることが文化心理学研究の知見からも明らかにされている。特に日本社会をはじめとした東洋社会においては、西洋社会で優勢な「独立した個人」を単位とした幸福だけでなく、地域で共有される「集合的な幸福」が重要な意味を持つとされる。東洋文化圏にありながら西洋社会を基盤にした近代化を遂げてきた日本社会が現代のグローバル化時代において幸福はどのように捉えられているのかは、今日非常に重要な課題である。

本研究報告においては、まずこれまでの文化心理学の知見に基づいて、「日本における幸福感とはどのようなものか」について、実証研究のレビューを行う。具体的には日本においては他者との協調性、人並み志向、穏やかな日常性などが重視されていること（そしてそれは北米での幸福感とは異なること）を述べる。次に、現在行っている実証研究計画について述べる。具体的には西日本の農業・漁業地域における地域リーダーを対象とした調査について取り上げる。「農村地域社会」「漁村地域社会」それぞれにおける幸福感の特徴や「人々のつながり」がどのようなものであるかを検討する。

それぞれの地域の社会・文化・生態学的環境に応じた幸福の形とは何か、さらには、地域社会における「つながり作り」について考察し、幸福の醸成に関する実践可能な成果を社会に還元するためにはどのようなことが必要であるのかを議論したい。

## 研究報告 3

### 発達障害と現代の意識 ―臨床心理学からのアプローチ―

河合俊雄（こころの未来研究センター 教授）

畑中千紘（こころの未来研究センター 上廣こころ学研究部門 特定助教）

2000年代以降、発達障害の急増が各所で指摘されてきた。発達障害は、カナリー（1943）らによって提唱された自閉症にはじまり、主要な特徴は「相互的社会性」や「コミュニケーション」、「想像力」の障害とされている。当初は母子関係に起因するとして理解されてきたが、現在では認知機能・中枢神経系の問題とされ、療育や訓練による対応が中心となっている。

それに対して発表者たちは、発達障害への心理療法的アプローチを試み、さらには発達障害を切り口として、現代の意識のあり方について考察を進めてきた。これは、研究が即ち社会貢献であるというユニークなものである。また、旧来の心理療法は発達障害に通用しないため、このプロジェクトは新しい心理療法の方法を伝えていくための人材育成の側面も担っている。それと同時に、科学的な枠組みの中でも、心理療法の有効性を確かめ、また見立てを正確にするために行ってきた2つのプロジェクトの成果を発表したい。

「子どもの発達障害への心理療法的アプローチ」プロジェクトでは、クライアントの主体に焦点を当てることによって、6ヶ月間のプレイセラピーで発達指数が上昇したり、そのバランスがよくなったりすることが示された。発達障害へのプレイセラピーは無効とする立場があるなかで、実証的にその効果が示されたことについて、親子関係を視野に入れた分析から、関係性の問題にも焦点をあてる。「大人の発達障害への心理療法的アプローチ」からは、見立ての難しい軽度の事例のアセスメントに資するポイントとして「焦点づける力の弱さ」をあげ、主体の弱さという発達障害の本質について考察する。

発達障害の増加は、コミュニティの崩壊、社会構造の平板化などによって、現代社会において主体性を確立することがむずかしくなっていることとの関連も考えられる。本研究報告では、発達障害の症状や心理療法を切り口として、現代の意識のあり方について考察し、また逆に現代の意識のあり方から発達障害という問題を捉えることができることを議論したい。

## ディスカッサント プロフィール

### 三嶋理晃氏

京都大学 理事（国際担当）、京都大学医学部附属病院 病院長

1977年 京都大学医学部卒業。同大胸部疾患研究所勤務。1986年同大胸部疾患研究所理学呼吸器科講師。1992年 助教授。1998年 同大医学部附属病院理学療法部助教授。2001年 同大大学院医学研究科呼吸器内科学教授。2008年 同大医学部附属病院副院長。2011年 同大医学部附属病院院長。2012年 同大理事・副学長、医学部附属病院院長併任。2005年 ベルツ賞一等賞受賞（「COPDの病態解析と治療法開発・治療評価への挑戦」）2005年 “Harasawa Memorial Award”（アジア太平洋呼吸器学会）受賞。日本呼吸器学会常務理事、日本呼吸リハビリテーション学会理事、アジア太平洋呼吸器学会理事、厚生省難治性疾患研究事業「呼吸不全に関する調査研究班」班長、第29回日本医学会総会（2015年開催）準備委員長。

### 熊野英介氏

アミタホールディングス株式会社 代表取締役会長兼社長、公益財団法人信頼資本財団理事長。

著書『思考するカンパニー- 欲望の大量生産から利他的モデルへ』、『自然産業の世紀』（共著）。

アミタグループは、持続可能な事業と社会の実現を目指す環境分野のリーディングカンパニーグループとして、企業の廃棄物処理の計画・運用から、環境コンサルティング、循環社会モデル事業、環境教育事業など多岐に渡る事業を展開。

他に、特定非営利法人アースウォッチ・ジャパン 理事、一般社団法人ソーシャルビジネスネットワーク 副代表理事。

連携プロジェクト ポスター番号一覧

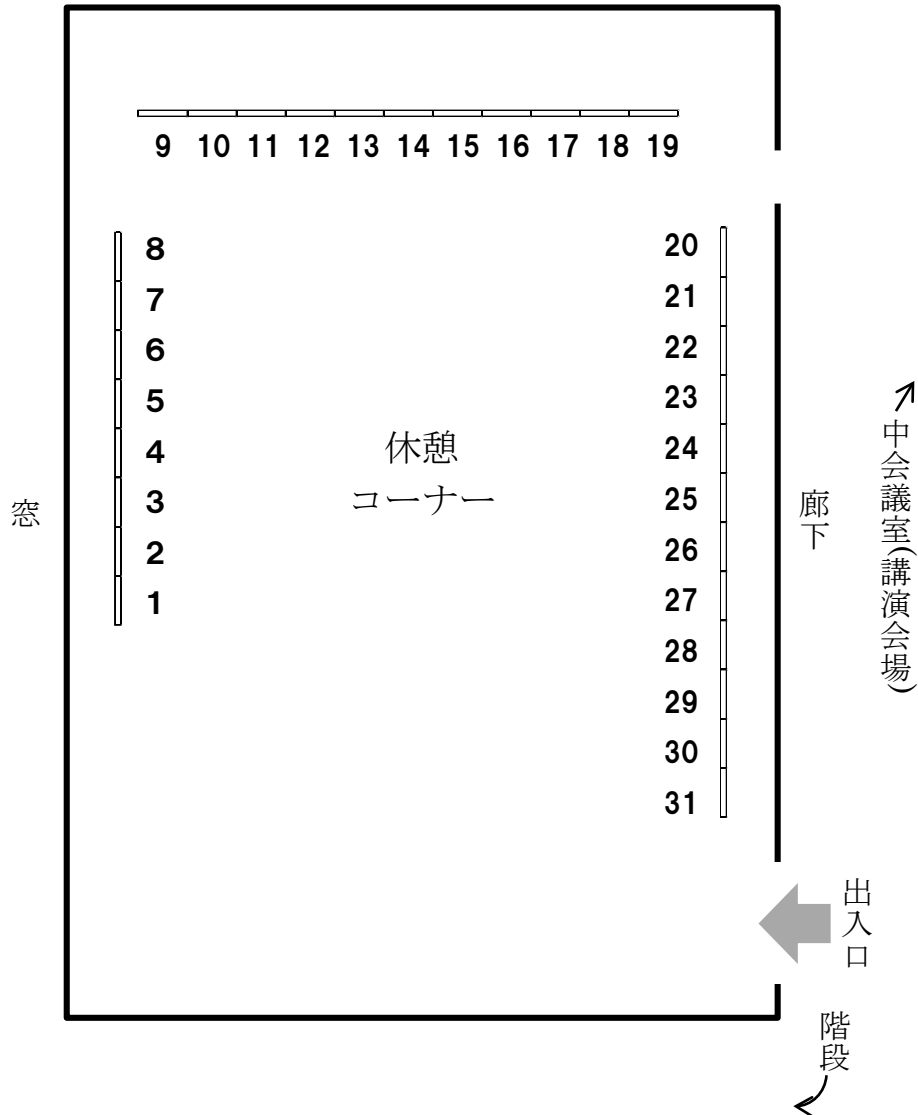
No.	プロジェクト名	研究代表者
1	こころ学創生：教育プロジェクト	センター全体
2	こころ塾 2013	吉川左紀子
3	他者理解に関わる感情・認知機能	吉川左紀子
4, 5	発達障害の学習支援・コミュニケーション支援	吉川左紀子
6	信頼・愛着の形成とその成熟過程の比較認知研究	森崎礼子
7	快感情の神経基盤	船橋新太郎
8*	不正直な行動の神経生物学的基盤の研究	阿部修士
9*	ストレス予防研究とストレス緩和プログラム開発	カール・ベッカー
10*	治療者・社会・病に関する意識調査	カール・ベッカー
11*	倫理的観点に基づく認知症介護の負担改善	清家 理
12*	終末期に対する早期支援	清家 理
13*	大人の発達障害への心理療法的アプローチ	畑中千紘
14*	発達障害へのプレイセラピーによるアプローチ	河合俊雄
15*	甲状腺疾患におけるこころの働きとケア	河合俊雄
16*	こころの古層と現代の意識	河合俊雄
17*	こころ観の思想史的・比較文化論的基礎研究（人類はこころをどのようにとらえてきたか？）	鎌田東二
18*	こころとモノをつなぐワザの研究	鎌田東二
19*	癒し空間の比較研究	鎌田東二
20	東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて～	鎌田東二
21*	国民総幸福（GNH）を支える倫理観・宗教観研究	熊谷誠慈
22*	ブータン仏教研究プロジェクト	熊谷誠慈
23*	地域の幸福プロジェクト（文化心理学領域）	内田由紀子
24	ヒマラヤ宗教精神の研究	熊谷誠慈
25	農業・漁業コミュニティにおける社会関係資本	内田由紀子
26	コミュニケーションの言語・文化的基盤	内田由紀子
27	被災地のこころときずなの再生に芸術実践が果たしうる役割を検証する基盤研究Ⅱ	京都造形芸術大学准教授・大西宏志
28	身体と象徴：自然・社会・人体のリズムの総合的研究	山梨大学准教授・木村はるみ
29	心理療法場面にみられる象徴化機能の現代的問題に関する臨床心理学的研究	東洋英和女学院大学准教授・前川美行
30	子どもの発達障害と作業療法	追手門学院大学准教授・長岡千賀
31	高齢者の認知能力に及ぼす運動の影響	熊本大学文学部教授・積山薫

\*上廣こころ学研究部門

## ポスター会場 稲盛財団記念館 3F 大会議室

ポスター会場オープン 12:00～17:30

ポスターセッション 15:25～16:00



### ■上廣こころ学研究部門とは ■

京都大学こころの未来研究センター上廣こころ学研究部門は 2012 年 4 月に設置されました。現在、心理学、神経科学、宗教学、医療倫理学など「こころと倫理」に関わる多様な専門分野の若い研究者が集い、日々研鑽を積みながらさまざまな研究活動やアウトリーチを行っています。このポスター会場でも 16 のプロジェクトが研究成果を提示しています。実践知・伝統知・潜在知のあり方を探求し、現代社会を生きる価値を提言するために今後もさまざまな形で社会発信を行います。

**研究報告会終了後のポスターは、こころの未来研究センターで保管いたします(センターの廊下などに掲示させていただきます)。終了後の撤去はセンターのスタッフが行います。**